

活動報告 Part 4 欧州文化首都AIR 交換プログラム

European Capital of Culture, ECoC2015 Pilsen



Youkobo Art Space, Tokyo



目次

まえがき

アーティスト・イン・レジデンス（AIR）活動を通して欧州文化首都から学ぶこと

村田達彦（遊工房アートスペース）

メッセージ

DEVĚTSIL - 三原聡一郎：世界の本質を知らしめる

テレザ・スヴァスコヴァ（OPEN A.i.R.）

レポート

1. 正直な話、ピルゼンに行くことは夢でした

三原聡一郎（アーティスト）

2. スモール・イン・ジャパン / Poème électronique pour le monde

ミハル・ツァーブ（アーティスト）

付録

受入AIR紹介

- OPEN A.i.R.（プルゼニ・チェコ）

- 遊工房アートスペース（東京）

Microresidence Networkのはじまり

活動報告 AIR Exchange Program between Youkobo and ECoC

Part1: Tokyo x Kosice 2013 and from now on

2013

Part2: European Capital of Culture, ECoC 2014 Riga

2014

Part3: Tokyo x Kosice 2013/2014

2014

● Part4: European Capital of Culture, ECoC2015 Pilsen

2015

アーティスト・イン・レジデンス（AIR）活動を通して欧州文化首都から学ぶこと

村田達彦（遊工房アートスペース 共同代表）

プログラムのあらまし

長い歴史を持つ欧州文化首都制度の精神を理解した上で、欧州文化首都と日本の双方のAIRを通して行う活動として、遊工房アートスペースでは、EU・ジャパンフェスト日本委員会の協力と支援のもと、欧州文化首都への日本からのアーティスト派遣、双方のAIRプログラム間のアーティストの交換などを積極的に進めてきた。欧州文化首都に制定されている都市での現代美術の魅力的な展開を日本の若手アーティストにも体験できる機会として捉えると共に、これまで、ロンドン、ベルリン、パリ、アムステルダムなど大都市で活動するアーティストに偏りがちであった来日のチャンスを、欧州文化首都に制定されている都市を拠点とする作家たちにも広げ、彼らのキャリア・アップの支援と共に、欧州文化首都と日本の橋渡しとなるよう心掛けている。

ECOC 2015, Pilsen との活動

Pilsen市とのアーティストの相互交換については、ECOC2015 Pilsen 開催をめざし開設されたばかりの現地AIR「OPEN Air」に松本恭吾を派遣したことから始まった。ECOC年の2015年には、三原聡一郎を派遣7月～9月に派遣、同年10月～12月には、Pilsenから遊工房アートスペースへMichal Cabを受入れ、双方での滞在制作・発表の機会が実施した。2015年のそれぞれの3か月間の活動報告は以下の通りである。実は、Pilsen市との関わりは、このAIR交換ばかりでなく、西ボヘミア大学の国際夏季講座ArtCampとの繋がりもある。EUジャパンフェスト古木事務局長からこの国際的な活動の存在を2013年に紹介頂き、2013年初めての若手アーティスト1名の派遣、翌年2014年には若手アーティストに加え、全国の美術系大学の協力も得て美大生も含めた10名の参加、2015年には、Camp参加5名と共に、新たにArtCampへの日本人講師の派遣も実現できた。この活動は、日本のアーティストの海外滞在体験の貴重な場であり機会として知られるところとなり、2014年秋、都内で開催のAIRネットワークフォーラムへ、現地大学から専門家2名の招へい、2015年、Camp会期前後含めた1ヶ月間のインターン派遣も実施、この仕組みの日本国内での展開の可能性検討に発展している。

活動の継続と拡大

幾つかの欧州文化首都にあるAIRとの作家交換プログラムの交流を通して多くの成果もたらされた。作家交換の継続とともに、新たな欧州文化首都とのAIRを通じた交流、そして作家交換への発展も進めていきたい。この継承の為、同様の活動をしている国内外のAIR仲間との情報共有により一層の発展が期待される。国際規模の活動体としては「Res Artis」、国内は「AIRネットワークJapan」が窓口だ。さらに世界中に存在するアーティスト主導の小規模AIR「マイクロレジデンス」がその活動の核となるかもしれない。また、この作家交換プログラムが若手作家への体験の機会と場ともなるよう、各国のAIRと美術大学の連携による若手アーティストのAIR体験機会創出の仕組み作りへの発展も期待している。（Y-AIR構想、AIR for Young）

活動の推移

遊工房アートスペースと欧州文化首都との関わりは、リトアニアからの2人のアーティストSaulius ValiusとDiana Radaviciuteの2008年の遊工房での滞在制作・発表がきっかけとなった。翌年、ECOC 2009 Vilniusの機会に、EU・ジャパンフェスト日本委員会の支援を得て、両国のアーティストによる交流展「雨と太陽の出会いー虹の架け橋」を開催。日本から12名のアーティストと2つの文化団体、リトアニアは9名のアーティストと地元の美術館などが参画、大きな成果を残した。2010年Istanbul、2012年Guimaraes、2013年Kosice、2014年Riga、2015年Pilsen…。遊工房アートスペースで実践している、規模は小さいが、個々の顔が見えるアーティスト交換の試みは、同様の活動を進めているアーティスト主導の小規模AIR「マイクロレジデンス」仲間との情報の共有により一層の発展が期待される。



DEVĚTSIL^{*1} - 三原聡一郎：世界の本質を知らしめる

テレザ・スヴァスコヴァ（OPEN A.i.R., ディレクター）

三原聡一郎のレジデンス滞在は非常に刺激的であった！審査員と我々の提携先である遊工房アートスペースが初めて共同で、環境問題とテクノロジーに関する話題を扱った作家を選出することとなった。このトピックは天然資源の利用とアプローチ、これに密接に関連する代替エネルギー資源の未来、また一部政府による環境への対応（場合によっては懸念を抱くもとになっているが）など、多くの問題を思い起こさせる。

聡一郎は7月の初頭ピルゼンを訪れ、長期プロジェクトとして継続している「blank」の作業にあたることを目的としていた。福島での大惨事に恐れ戦くとともに、そこから着想を得て、2011年よりこのシリーズに於いて、聡一郎は芸術と科学の関連性を継続探求しており、彼は自身が生きる時代と社会のある種の指針となっている。彼は哲学者であり、批評家でもあるにも関わらず、状況の深刻さに妨げられることがなく、彼の寓話的なインストレーションは、進歩への信仰と人類の英知に対する純粋な敬意を感じることが出来る。

ピルゼンはDEPO2015のレジデンスで作業していた最新プロジェクト「Cosmos」で、彼は物質世界とそこを取り巻く生活が隠喩として表現され、スペース全体の5%のみを使用したものである。このインストレーション作品は非常に特殊なもののため、ここにその内容を補足する。作品の中心に代替エネルギー資源を用いた生きたエコシステムが設置され、聡一郎は最新の生体電子テクノロジーを用い有機体の活動からエネルギーを生成する。ここにエネルギー事情の未来の可能性が象徴化されているのである。その他のインストレーションは空間上のダーク・マターが我々を取り囲んでいる等のエコシステムを称賛するものとなっている。三原聡一郎はこの作品で、世界の本質についてどれほど我々が知り得ていないかを示している。

9月13日に行われて展示のオープニングでは、卵の殻が作品から発射され、これは輪廻の可能性を意味する。また、作品中央のコケに植えられた植物は落である。冬の植物である落の状態の良いものを9月に見つけるのは容易ではなかったが、幸運にも、トレボン（Třeboň）にあるthe Institute of Botany of the Academy of Science of the Czech Republicの協力により、この植物を作品に取り入れるという日本人作家の希望が実現した。この植物名前が1920～30年代に活動していたチェコの前衛アート・グループの名前と同じこともあり、作家はこの植物を作品に取り入れることを希望した。このグループの何名かが、ライト・アートとキネティック構造のパイオニアとなり、それは正に今日の三原聡一郎と同じように芸術と科学の繋がりを模索していたのである。

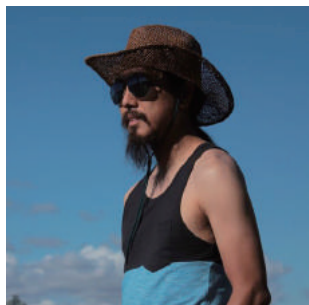
プロジェクトが刺激的であればあるほど、OPEN A.i.R.チームにとってやりがいのある仕事となった。関われば関わるほど、このトピックに関する造詣が深まり、また聡一郎の勤勉さ、ユニークなアプローチ、チェコ市街近隣の自然資源への対応方法に感銘を受けた。私の同僚であるHonzaとMattieuは、プロダクションやイベント管理といった定常業務以外に、作家と共にピルゼン周辺の湖に良質の土を探しに行くなど、冒険心溢れる非常に奇妙な作業を行うこととなった。また、このような作業を共にすることにより、聡一郎は偉大なVIPゲスト作家としてだけでなく、我々の同僚、OPEN A.i.R.のチーム・メンバーとなったのである。

彼はthe Pilsen – European Capital of Culture 2015が企画するイベントに大変に興味を持っており、雰囲気ある工業地にて我々が運営するDEPO2015での全てのイベントに参加したと言っても過言ではない。また、レジデンスに滞在していた他の作家（Nicoletta Cabassi, József Havasréti, Patricia Leighton & Del Geist, Janna Ullrich）のプロジェクトもフォローしていた。最終プレゼンテーションと自身のプロジェクトに注力する以外にも、彼はDIY Arduinoのプログラミング・ワークショップをthe Bastl Festivalの一環として、8月29日にDEPO2015にて実施した。このワークショップは大成功を収め、また彼のArduinoのプログラミング・レシピをオープン・ソースとして共有して貰うこととなった。このレジデンスが非常に実りあるものとなったことに、感謝の意を表したい。また、聡一郎が一日でも早くピルゼンに（彼が言うように）美味しいビールを味わいに、そしてチェコの微生物と我々とまたコラボレーションをするために戻ってくることを願っている。EUジャパンフェスト日本委員会及び、遊工房アートスペースのサポートに感謝を。

^{*1}“devětsil”とはチェコ語で「9つの力」と「落」を意味し、またチェコのアーティスト・グループの名前でもある。

正直な話、ピルゼンに行くことは夢でした

三原聡一郎(アーティスト)



微生物をアートに活用している私は、発酵の食文化に興味が無いわけではなく、しかしアーティストとして、短い間でしたが有名なかの源泉の地に住まうとは思っていませんでした。

そんな楽しい夢とは裏腹に、滞在中はチェコを含むEU、そして自分の国を通じて近代国家の枠組みについて改めて再考させられる時期でした。日本では民主主義や立憲主義の意義が問われ、EUでは難民問題から目を背けられない状況に至った時期でした。

しかしチェコの地ではメディアを通じて意識する自分のアイデンティティとも、これまでの海外生活とも、また異なった感覚を体験出来た場所でした。滞在中、你好でなく、ドイツ語、次にイタリア語で話しかけられる体験は驚きでした。残念ながらどちらも解せない自分は「ドブリーデン」「ヤポンスカ」と返すだけで精いっぱいでしたが、それでも乗り遅れそうになった列車ホームの間違いをとっさに教わったり、毎週末に開かれるフリーマーケットでの交渉を楽しみ、arduino自作ワークショップでは電子回路の基礎を通じて半日も手を動かしました。特にバスに忘れたiphoneを探して市の遺失物置き場を訪ねて発見した思い出は最も感慨深い瞬間でした。本当に皆さんありがとう。とても多く学びました。

その滞在中制作に私は2011年から進めていたプロジェクトを継続しつつ、現地での未知の可能性を楽しんで受け入れようと思っていました。私はプロジェクトが始まった年に東日本を襲った自然、そして人工的な災害をきっかけにテクノロジーとの距離感を表現し始めました、2年前からエネルギーの概念に生命の観点を含めた新しい基準の場を模索していました。以前から行ってきた土壌のリサーチを引き継いで、有機物の豊かな水辺のリサーチから始まり、砂そして水生植物や苔の採取と栽培を行い、野外インスタレーションでの発表という全てが初めてづくしの滞在中でした。制作のリファレンスを多く芸術以外に積極的に取り入れている私にとって、従来の芸術が扱う範囲を大幅に逸脱した奇妙なリクエストに快く応じてくれたスタッフには非常に感謝しております。

事前に20年代に欧州で同時代的起こった芸術運動ディヴィエトスィルをテクノロジーアートの観点から調べていましたが、この語の意味することの重要さに気付いたのは、しばらく滞在中の後でした。エネルギーが、力学、化学、熱、光など9つに定義されることを知っていた私は、この生命体がチェコ語で「9つの力」を示していることに気付くと感動しました。真夏に滞在中の私が、この冬のハーブい出会う為にチェボネの植物研究所に問いあわせ、快く協力してもらえたことは、まさにチェコでしか起こり得ない嬉しい偶然でした。

ディヴィエトスィルそして苔、自作のミルを用いたコンポストデバイス、卵殻を中空に打ち上げるデバイス、そしてゆるやかな球を描く銅のワイヤーフレームなど多くの要素を組合せ、生命と物質の境界や、全宇宙の物質の存在比率など、制作過程でたどり着いた要素をひたすら模索しました。

ところで私の活動は一体どのように受け止められたのでしょうか?最終プレゼンテーションで、この作品に至る経過を10年以上前の作品から説明しました。しかし、それでもこの滞在で生み出された作品について、僕自身、まだ的確な言葉を見つけてないからです。ここで得た体験を考えると、日本、そして芸術という漠然とした言葉が果たして、どれくらい意味を持つのか僕にはわかりません。むしろ、もしDEPOの皆さんが僕の滞在を語る時にその様な言葉抜きに、純粋に何を行ったか、つくったかを述べる機会が有り、その時の世界の状況について話が膨らむことになれば、それは世界に対しての純粋な人工物だと感じます。そこから更に人工物という語に含まれる(もちろん!)芸術の意味を考えてもらえたら!と、またもう一つ別の夢をピルゼンに残しつつ、次回訪れる時を楽しみにしたいと思います。

最後になりましたが、DEPO2015そしてEU・ジャパンフェスト日本委員会、遊工房アートスペース及び女子美・日沼研の皆様、重ねてこの濃密な約3ヶ月の為の様々なサポート本当にありがとうございました。今後もこのプロジェクトを継続していく過程で、ディヴィエトゥスイルに出会えたとても重要な通過地点であると切に感じています。

2015年 7-9月 OPEN A.i.R.滞在



Soichiro Mihara

Born in 1980, Tokyo, Japan. Works in Kyoto, Japan.
<http://mhrr.jp/>

Solo Exhibition

- 2013 "the world filled with blanks" Kunstraum bethanien, Berlin, Germany
- 2013 "the world filled with blanks" Kuan-Du museum of fine art, Taipei

Selected Group Exhibition

- 2014 "Sapporo International Art Festival 2014" [SIAF2014], Sapporo, JAPAN
 - "FILE - Festival Internacional de Linguagem Eletrônica" Centro Cultural FIESP, Sao Paulo, Brazil
 - "Crit Session", ARTLAAB, Perth, Australia
 - "Distant Observations. Fukushima in Berlin", Kunstraum bethanien, Berlin, Germany
- 2013 "mex21" Künstlerhaus, Dortmund, GERMANY
 - "Bio Media Art" 3331 ARTS CYD, Tokyo, JAPAN
- 2012 "OPENSPACE" NTTICC, Tokyo, JAPAN
 - "SOUND ART - SOUND IS A MEDIUM OF ART" ZKM, Karlsruhe, GERMANY
- 2011 "Simple Interaction - Sound Art from Japan" museum of contemporary art, Roskilde, DENMARK
 - "Sound Creatures" Galerie Grand Siecle, Taipei, TAIWAN
- 2010 "ISEA2010RUHR" kunstverein, dortmund, GERMANY
- 2009 "CodedCulture" MuseumQuarter, Vienna, AUSTRIA
- 2008 "Media City Seoul" Seoul City Museum, Seoul, SOUTH KOREA
- 2007 "Emergencies#3" NTTICC, Tokyo, JAPAN
- 2006 "PRIX ARS Cyberarts 06", OK Center, Linz, AUSTRIA
 - "transmediale 06 award exhibition", akademie de Kunst, berlin, GERMANY
 - "Ogaki Biennale 06", Zensyou-ji (temple), Ogaki, JAPAN
- 2005 "Exploration of Time", YCAM, yamaguchi, JAPAN

Awards, Grants

- 2015 "Prix Ars Electronica, SoundArt Digital Music category, honorary mention.", ARS ELECTRONICA
- 2014 "Project to Support the Nurturing of Media Arts Creators", Agency for cultural affair JAPAN
- 2013 "17th Media Art Festival Art division excellence award", Agency for cultural affair JAPAN
 - "Japanese Government Oversea Study Program for Artists", Agency for cultural affair JAPAN
 - "Tokyo Wonder Site Berlin Exchange Program", Tokyo Wonder Site
 - "Creative Partnerships with Asia", Australian Council
- 2012 "Ryuichi Sakamoto special July prize", tokyo sonic art award
 - "GOOD DESIGN AWARD 100", Ministry of Economy, Trade and Industry JAPAN
 - "Best Demo Award", HapticSymposium
 - "Prix Emerging Technologies", Laval Virtual
- 2006 "transmediale award", transmediale
 - "Prix Ars Electronica, Interactive Art category, honorary mention.", ARS ELECTRONICA

Artist In Residence

- 2013 "Kuan-Du Museum of Fine Arts", Taipei, Taiwan
- "Kunstraum Bethanien", Berlin, Germany
- "SymbioticA", Perth, Australia

Education

- 2006 MA, Institute of Advances Media Arts and Science [IAMAS]
- 2004 BA, Tama Art University (Information design department)



スモール・イン・ジャパン / Poème électronique pour le monde

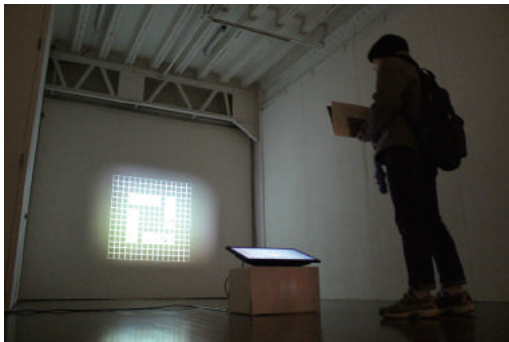
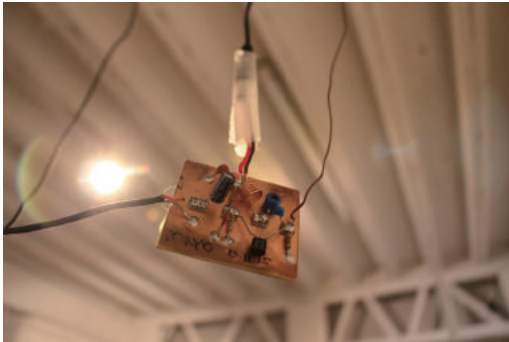
ミハエル・ツァーブ（アーティスト）



遊工房アートスペースにおける2ヶ月半のレジデンスでの経験を語るのは容易ではない。私自身、日本を訪れ、エマニュエル・レヴィナスの言う「（あらゆる意味における）他者」の芸術、文化、倫理、化学、宗教に向き合いたい気持ちを、言葉に発さずとも常に持っていた。「東京に行ったとある建築家が、その後、頭がおかしくなったと聞いたことがあるけど、どうだった？」とは、プラハに帰国直後の1月、古い友人に掛けられた最初の言葉である。事実、東京での経験（パチンコ/スロット、歌舞伎町、中野、秋葉原の電気街、渋谷でのノイズの洪水、北斎の春画、社会の商業化とゲーム化、温泉等々）に部分的に打ちのめされたが、正直に言うと、私にとって日本文化は非常に納得のいくものであった。日本的なやり方とは、ある意味、与えられた指示に従うこと（ここにはある種の完結性がある）だと理解する一方で、個性に重きを置く場面も多く見受けられた。これは特に、地域にあるユニークな建築物への印象となる。次に日本（あまり東京以外に足を延ばさなかったので、東京とするべきかもしれないが）とは、極端な極性を持ち合わせた文化と言える（駅周辺のノイズに彩られたカオス溢れる生活がある一方で、他方ではそこから2〜3通りを挟むと、神社やお寺の静寂に身を置ける環境を見つけることができる）。この融合と極端さは、伝統行事である七五三がKFCの商業的なクリスマスと手を結びパッケージ化されているように、例を挙げたら限がないくらい日常生活に見受けられる。

提案書に謳っているように、今回の滞在における私のサウンド・アーティストとしての使命は、複数チャンネル・サウンド・システム（ラズベリー・パイ2（超小型PC）とピュア・データ（プログラミング言語）をベースとしたオープン・ソース・システム）の開発とそこをプラットフォームとした制作であった。このシステムはモジュラー（ラズベリー・パイのクライアント台数ぶんだけ、サウンド・チャンネル数を保持）であり、バリエーション（WiFiネットワークを介することにより、如何なるスペースにも対応）である。これをレジデンスの「主なゴール」とし、システムは展示で最終的に発表された。また、このシステムを使用したエレクトロ・アコースティック作品「Poème électronique pour le monde」を、エドガー・ヴァレーズへのオマージュとして作曲した。このシステムには多くの課題が残っているが、2016年の春までに解決/アップグレードを行い、Školská 28ギャラリーにて「Nástrojári（楽器製作家）」のタイトルの下、システムの展示を行う予定である。また舞台音響デザインに挑戦することも考えており、Kristýna Taubelová（舞台美術家）と共に新曲の制作を予定している。システム上の課題を解決し、幾つかのアップグレードを経た後、GitHub上にオープン・ソースとしてこのプロジェクトの全ソースを公開する予定である。

滞在中は上記以外にも色々なイベントに携わることとなった。その中にはもちろん、東京や日本文化をより深く知り/理解しようと努めることもあったが、これは完全に不可能と感じた。ひょっとすると、「Small In Japan」というパフォーマンスをしたのも、このことが無意識化の感情や動機になっていたのかもしれない…Hakobune（ヨリフジ タカヒロ）とLZ129（岡崎竜太）といった地場のノイズ・ミュージシャンと連絡を取り、新宿近辺（ART SPACE BAR BUENA、RENTAL SPACE）でライブを行い、遊工房アートスペースのギャラリーでは池田哲と新井陽子とセッションを行った。また、主な国立ギャラリー、科学博物館や小規模なイベント（Home Base Projectやトーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバル）を訪問した。



この中でも重要な出来事は、哲学者/ラジオ・アーティストである粉川哲夫との出会いである。彼とはライブ・コーディング、プラハ、フランツ・カフカ、放送やFM送信機に関し、長時間にも及び充実したディスカッションを行うことが出来た。粉川氏は自身が設計したシンプルなFM送信機を使って即興演奏を行っているが、私自身、彼の設計を遊工房アートスペースで行った最初の展示に導入した。今後ともコラボレーションを継続していく予定であり、事実、Art's Birthday event では既に行っており、今後もカフカ・プロジェクトで一緒にできればと思っている。また、フェミニスト・アーティストでありパフォーマーでもあるイトー・タリとの出会いも重要な出来事であった。遊工房アートスペース及びKarin Písaříkováのお蔭で、彼女と知り合うことができ、レコーディングまでさせて頂いた。彼女の声は上記の作品で使用させて頂いた。

遊工房アートスペースに関してだが、アーティスト・レジデンスを経験するのは、私自身2回目となるが、遊工房アートスペースは非常に組織だった運営が出来ていると言えるだろう。非常に新鮮に感じたのは、常に多くのアーティストが居ることにより、議論や経験の共有が活発に行われていたことである。個人的に、商業化した作品を作らせるのを善としたギャラリーではなく、よりプライベートかつフレンドリーな関係性を構築できるスペースを好んでいることもあり、その点で、小規模かつ家族的ギャラリーである遊工房アートスペースは私の好みに全て当てはまる。制作をする上で、全くプレッシャーを受けることがなく、自由に開発と実験を行うことが出来た。また、遊工房アートスペースの持つノウハウに刺激を受け、プラハにサウンド・アートに特化したNPO団体/ギャラリーの設立をより真剣に考えるようになった。また、女子美術大学における多くのプレゼンテーション/講義、ワークショップの機会を提供頂き、遊工房アートスペースに感謝の意を表したい。一点だけ遊工房アートスペースに関しコメントするならば、プロジェクター、LCDパネル、スピーカー等の資材のアップグレードを提案したい。

最後に、遊工房アートスペースでの滞在は非常に満足いくものとなり、真新しく、異なる文化に触れることは常に刺激となった。また、制作と作家としての課題に対し実験をする場所と時間が十分にあり、何度か制作に没頭し過ぎることがあり、自身の内なる声(「スタジオを出て、東京をエンジョイしないと…」)に従って重い腰を上げることも必要だった。

今後とも遊工房アートスペースとのコラボレーションを継続出来ることを願う。

2015年 10-12月 遊工房アートスペース滞在

Michal Cáb

1980, Kyjov, Czech Republic
WWW: <http://ticho.multiplace.org>

EDUCATION

2009 – 2014 Academy of fine Arts in Prague, Intermedia studio of Tomáš Vaňek (Ph.D. degree)
2001 – 2002 Stage at Katholieke Universiteit, Leuven
1999 – 2005 Faculty of Theology in České Budějovice (Mgr. degree)
1995 – 1999 Gymnasium in Uherské Hradiště

WORK EXPERIENCE

2014 Head of Software and Multimedia studio at Scholastika School, Prague
2009 – 2014 External teacher of open source technologies at Academy of Fine Arts in Prague
2009 – 2014 External teacher of open source technologies at SUPŠ Bechyně
2009 – 2012 Assistant at New Media studio at Academy of Fine Arts in Prague

EXHIBITIONS (selection)

2015 *poème électronique* - pour le monde, Youkobo Art Space, Tokyo
2015 *signals*, Youkobo Art Space, Tokyo
2014 *Site Specific: Made-to-order Art*, Galerie U dobrého pastýře, Brno
2014 *If... than... else...*, TIC, Brno
2014 *A Street Event*, Vzájemnost gallery, Praha
2013 *T...O, 2+1* gallery, Bechyně
2013 *Orbis Pictus Reloaded*, Doma gallery, Kyjov
2012 *Pas Par Là*, ESAAA, Annecy
2012 *Ich liebe Ich*, Blahobyt gallery, Praha
2011 *Jiří Novák in motion*, Litoměřice
2010 *Paper heads*, Trafačka gallery, Praha
2010 *Connection*, Embassy of the Czech Republic, Berlin
2010 *Instant Supper*, AVOID gallery, Praha

MUSIC/THEATRE/AUDIO-VISUAL PERFORMANCES (selection)

2014 *Trasy vlasů* [second link], Alfréd ve dvoře, Praha
2013 *Koupelny I., II.*, Alfréd ve dvoře, Praha
2013 *Mondšajn*, Meetfactory, Praha
2012 *Without that*, composition for Czech Radio 3
2012 *Laputoids*, Duchcov
2011 *Untitled*, BioOko, Praha
2011 *Multiplace Opening*, Dům umění, Brno
2011 *Orestek*, Na zábradlí, Praha
2010 *Sound installation*, National Library of Technology, Praha
2010 *Kokkola*, F. X. Šalda Theatre, Liberec
2009 *LOA 15 Steps*, NOD, Praha
2009 *Creative destruction*, AVU, Praha
2009 *Camille*, Alfréd ve dvoře, Praha
2007 *Mikroloops*, Školská 28, Praha



*poème électronique
pour le monde*



OPEN A.i.R.

Artistic residencies are places for international artists to meet. The main aim of the OPEN A.i.R. programme, which is being realised under the auspices of the Pilsen -European Capital of Culture 2015 project, is the opening up of Pilsen's cultural scene and the exchange of ideas, creative experience, processes, techniques and contacts.

The programme has been focusing on receiving Czech and foreign artists and sending Czech artists abroad; there are on-going successful collaborations with residential programmes and centres in Slovakia, Poland, Germany, the Netherlands, Japan, France, Hungary and others.

Since its inception in 2012, the programme has supported the work of more than 60 artists from various genres. We mainly focus on design, digital and interactive art and topic of recycling.

The OPEN A.i.R. programme currently resides at the DEPO2015 Creative Zone, with facilities such as two art studios and many spaces for the final presentations of residents. The artists can also use machines and the masters' craftsmanship in the open workshop Makerspace situated right at DEPO2015.

Website: www.depo2015.cz

OPEN A.i.R.
ARTIST
IN
RESIDENCE

2015 Pilsen
European Capital of Culture



Pilsen 2015. Concerning the photo (openair_photocatalogue) please refer that as (c) Petr Jiras. Thank you.



youkoboART SPACE

History

Youkobo Art Space houses its facilities and operates its programs within a building complex that was originally a clinic and sanatorium for tuberculosis patients from the 50's to the 80's. After the clinic closed, a section of the property was used as a home-stay style residence for foreign artists and students; another section was home to an animation studio for nearly two decades.

These spaces were refurbished in 2001 to officially become Youkobo Art Space. Youkobo Art Space has since facilitated a broad range of artists' activities through an artist in residence and gallery program, providing artists with important resources that benefit their artistic goals. The co-directors, Hiroko(sculptor) and Tatsuhiko Murata have welcomed over 200 artists of 20 different nationalities since founding Youkobo Art Space.

Address : Zempukuji 3-2-10, Suginami-ku, Tokyo, 167-0041 Japan
Phone : +81-3-5930-5009 Fax : +81-3-3399-7549
E-mail : info@youkobo.co.jp

www.youkobo.co.jp

Program Statement

Youkobo Art Space's primary objective is to support and enhance the creativity of artists by offering opportunities for artistic investigation on urban issues in a contemporary Japanese setting. Its various programs are committed to providing the local community with creative stimulus by promoting cultural exchange between international artists and local citizens.

Youkobo Art Space is very active in Suginami City and across Japan, organizing and presenting a wide range of non-profit activities, including exhibitions and events that are open to the public.

Studio / Gallery / Residence

Youkobo Art Space consists of two artist studios, a gallery and residential accommodations.

Other services

The gallery holds exhibitions of contemporary art and mostly solo shows. To apply please submit artwork images and resume. For more information contact the gallery.

Artist Studio rental is available but please note that priority of studio use is given to artist in residence and must accommodate to their schedule.

Access

Youkobo Art Space is located in metropolitan Tokyo, 15 km west from the city center.

From Narita International Airport, please take the limousine bus from Narita Airport, Tokyo to Kichijoji Station, 50km west from the airport (2 hours approx). Youkobo Art Space is a 5-minute taxi drive from Kichijoji Station.

A place for artists in Metropolitan Tokyo

Youkobo Art Space is located in a tranquil residential suburb in Suginami City, central Tokyo, and consists of an art gallery, artists studios, and artist in residence program.

The residency program offers local and international artists the opportunity to live, work, and participate in a solo exhibition and/or collaborative projects within the local community for periods of up to six months.

A member of

Res Artis WORLDWIDE NETWORK OF ARTIST RESIDENCIES

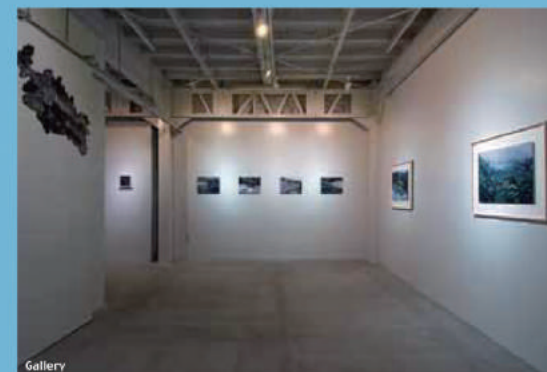
Microresidence Network www.microresidence.net



Studio 1



Studio 2



Gallery

(Photo : Masaru Yamaguchi)

マイクロレジデンス・ネットワークの始まり

マイクロレジデンス提唱者
遊工房アトスペース・共同代表
村田達彦

アーティスト・イン・レジデンス（AIR）とは何か？と問うた時に、ひとくくりでは語れない現状がある。

事業内容、運営主体、規模などが異なる多様な形が在るからだ。

AIR 事業の基本は、生活者としてのアーティストの創作活動の場と機会を提供するものと捉え、

これらの運営体・活動を総称したものを、「マイクロレジデンス」とする提案である。

このウェブサイト、AIR のネットワーク「Microresidence.net」は、マイクロレジデンスの顕在化と相互の活動の促進が図られ、

AIR の存在が、社会的な器となることを期待する有志により始まった。

2012 年秋、東京に参集したマイクロレジデンス・ディレクター（バーチャルな集いも含む）を中心に、

各 AIR 運営者の責任のもとに発信することで準備が始まり、2014 年 1 月運用開始した。

多くのアーティストや関連する方々に認知され、アーティストの創作活動の場と機会となり、アートが社会に不可欠である証として、

AIR 活動が重要な社会装置であることを広く周知させるために、一層多くのマイクロレジデンス機関の参画を期待している。

マイクロレジデンス・ネットワーク

www.microresidence.net

（注）Web 発足にあたり、2012 年の調査への積極的な応答をくださった国内外のマイクロレジデンス、

そして、2012 年秋、東京の遊工房アトスペースで行われたマイクロ・ディレクターズ・トークにご参集くださった皆様に

深く感謝申し上げます。2012 年の集いの活動内容と成果は、下記を参照頂きたい。

http://www.youkobo.co.jp/microresidence/index_en.html

